

一部を除き、車両規制を行わずに約4000人が公道を走る。大会の企画運営を担うのが、市民参加型スポーツイベント会社「ルート・スポーツ・ジャパン」(東京)だ。第1回から担当する増田英行さん(29)は「ライダーが多く、道路上の密度が増す。交通ルールを守ることが安全につながる」と訴える。

沿岸の道路は起伏やカーブが連続するほか往路復路の折り返し、トンネルなど安全管理上、注意を要する地点が多い。復興に伴い、

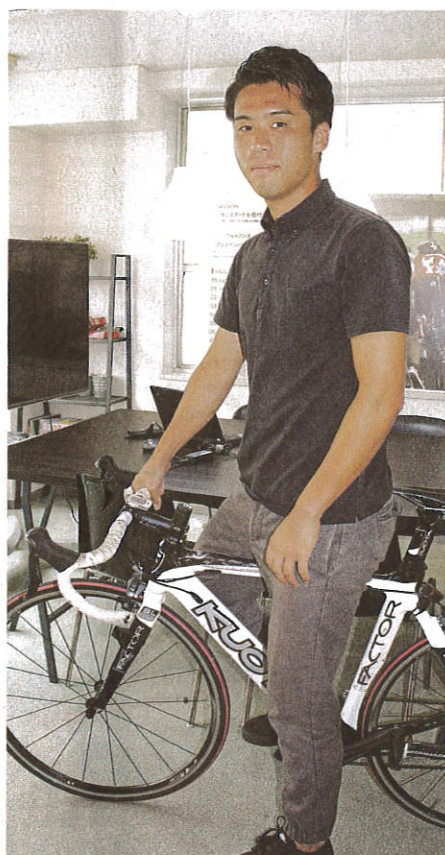
TOUR de
TOHOKU

2017

企画運営

ルート・スポーツ・ジャパン

増田 英行さん (29)



「ライダーがマナーを守り、地元と良い関係を築くことが大会継続のポイントになる」と言う増田さん
—東京・四谷

成功へ心一つに準備

道路状況も毎年変化する。喚起するのが約200人の状況に関する情報を集め、分岐点や道幅が狭くなるボランティアだ。「開催直 臨機応変に配置したい」と場所で見板を掲げ、注意を 前まで周囲の工事や路面の 語る。

一般道を走行するツール・ド・東北には、万全な安全対策が欠かせない。行き交う自動車、歩行者との共存が前提となるからだ。一緒に走りながら参加者を見守る走行管理ライダー。休憩所(エイドステーション、AS)で待機する医師や看護師。規模拡大を続ける大会の安全を主催者とともに支える運営会社。安全に対する裏方の思いを紹介する。

国内最大級の自転車イベントに成長した大会の準備は1年がかり。新コースの開催地となる自治体や警察と協議を重ね、参加人数や規約を詰める。当日は天候も気掛かり。雨天時はもちろん、晴天時は参加者の気が緩むのか、転倒件数は逆に増えるという。

「多くの関係者の思いを一つにして成功に導くことが大きなやりがい」。反省点やけが人などの最終状況を把握し終える大会1週間後、増田さんはようやく達成感に浸れる。

安全守る裏方たち

5th

コースは年々拡大